



佳作

書評 瀬戸内寂聴著『美は乱調にあり・諧調は偽りなり』
瀬戸内寂聴伝記小説集成第4巻（文藝春秋 1989年）
（和泉開架：913/S46-1//W）

文学部 1年 大木夏子

「伊藤野枝といっても、昭和生れの人たちにはおそらく何の記憶もなく、大正生れの人たちにさえ、ほとんど知られていない女の名前だろう」（p9）

本書を手にとってまず目に飛び込んできたのが、上の一文であった。大正昭和の人々にさえ知られていない伊藤野枝というこの謎めいた女性のことを、すぐにでも知りたいという衝動に駆られた時の興奮を未だに覚えている。

本書は女流作家瀬戸内寂聴氏が、様々な時代の女性の生涯を描いた伝記小説の一つである。大正時代最大のアナキストと呼ばれた大杉栄の妻であり、関東大震災後の混乱の中で彼とともに虐殺された、伊藤野枝という一人の女性解放運動家の短い人生が、膨大な文献と当時を知る人々の証言を基に、詳細に描かれている。また野枝の初恋の相手である、ダダイズムの詩人辻潤や、野枝が女性解放運動に目覚めるきっかけを作った平塚らいてう等、当時の文学者や芸術家の姿も浮き彫りにされており、大正時代の様子を克明に知ることに出来る貴重な歴史資料でもある。

野枝はありのままの感情をむき出しにする女であった。我が強く自分の思い通りにならなければ、二十代になっても人前で泣きじゃくったり、怒鳴り散らしたりしたという。いつまでも子供のような好奇心があり、思い立ったらすぐに行動に移し、監視や尾行の目などには一切臆することがなかった。当時の日本では、女性は男性に追従し自分の感情を抑えひたすら嫁ぎ先に尽くすという、「耐え忍ぶ女」としての姿が一般的であった。男性に逆らい自分の考えを主張することは、女性にとって不可能に近かった。そんな時代に、社会に自己を主張して、憲兵により殺害されるまでの二十九年の生涯を堂々と生き抜いた野枝の姿には、目を見張るものがある。

なぜ日本では、女性の首相が誕生しないのかと考えることがある。現在では日本にも、法律や政治経済に精通した女性がいくらでもいるはずである。にもかかわらず、女性はその知識と個性を存分に発揮する機会があまりにも少なすぎるのではないか。そしてその要因の一つは、女性の実力が男性のそれよりもやや劣っているという固定観念が、根強く社会に残っているからではないか。

就職においても女性は確実に苦勞させられる。女性が自分の個性を引き出し、実力を発揮できる舞台をつくる為に、社会全体が動いていかねばならないと思う。現代の女性たちが、もっと自信をもって積極的に社会進出できる国になる為の意欲が、今の日本にはまだ足りないように見受けられる。

伊藤野枝が衝撃的な最期を迎えてから今年で九十年だ。現在その名を知る人は幾人いるだろう。だが、強烈な個性を世に知らしめた彼女の生涯を知ることによって、女性は己の可能性を引き出すための手がかりを得るような気がする。女性に一步を踏み出させるだけの力が、本書には確かにある。